

異色のシンガー栗田麻利子

国際ジャズコンテストへ

ジャズシンガーでありながら大阪大文学部卒、大手リース会社勤務四年と異色の経歴を持つ栗田麻利子。写真、岐阜県可児市。が、



十一月にリトアニアで開催される国際ジャズボーカルコンテストに挑む。本場・米国の名門音楽大で学び、日本国内のコンテストで次々と入賞した実力で「上位を

目指す」と意気込んでいる。

オーストラリアやハンガリー、スペイン、フィンランド、ロシアなど世界各国から実力派が集まる「若手の登竜門」だけに「新たな

一步への足掛かりに」と期待が大きい。注目を集めることができれば、ヨーロッパでのジャズフェス出演につながる。

パークリー音楽大で本格的にプロ修業を始めて七年、帰国後のプロ活動としては四年。海外での活躍が現実味を帯びる。

リトアニアは第二次大戦中に日本の外交官・杉原千畝が多くのユダヤ人に「命のビザ」を発給して救った地でもあり「学校の授業で習った歴史ある場所で、ステージに立てる点も感慨深い」という。

現在、東海地方を中心にライブ活動も精力的に展開中だ。十一月三日には母校の岐阜県多治見北高の吹奏楽部員たちと「ジャズコン

サート」(多治見市文化会館)で共演。ライブ日程はウェブサイト(栗田麻利子で検索)で公開している。

必死さが胸打つ インタビュール集

「14歳Ⅲ」出版

十四歳のころを、どんな状況で過ごし、何を考え、どうやって「生き延びた」のか。今をときめくミュージシャンたちに、思春期真っ盛りの時期を振り返ってもらうインタビュール集「14歳Ⅲ」が出版された。エムオン・エンタテインメント刊、千七百二十八円。

音楽ライターの佐々木美夏さんによるインタビュールシリーズの第三弾は、バンド活動も行う脚本家宮藤官九郎やメジャーデビューしたばかりのシンガー・ソングライター大森靖子ら十二人が登場。

それぞれが、「いじめ」としか考えられない状況にあったり、ルックスコンプレックスからプチ整形したり。必死な姿が胸を打つ。

「ずっと三人でやっていく」。気持ちを一つにする彼らの目標は「日本武道館でのライブ」だ。

(加藤智子)

日本やDVDが配られ、自強して収録に臨まなければ